W-3

名詞構文を巡る諸問題

江口清子・眞野美穂・岸本秀樹

■　ワークショップの構成

企画・司会：江口清子

発表者：江口清子・眞野美穂・岸本秀樹

[1] 趣旨説明　司会者によるワークショップの趣旨説明（江口清子）

[2] 研究発表

発表 1「ハンガリー語の所有接辞について」（江口清子）

発表 2「日本語同格名詞句から見る名詞句の機能について」（眞野美穂）

発表 3「シンハラ語の名詞補文節について」（岸本秀樹）

[3] 質疑応答・全体討論　会場からの質疑応答および討論・全体のまとめ

■　企画趣旨

1.　研究の背景

名詞は動詞と並んで、ほぼすべての言語が有する品詞と考えられ、従来、さまざまな枠組みで名詞の意味や構造に関わる研究がなされてきた。特に印欧諸語では、冠詞、性や数の区別に対応する語形変化などの明示する形式を持つため、形態論での名詞の研究成果が創成期の言語学に大きく寄与した。近年もさまざまな枠組みで名詞の意味や構造に関わる研究は数多く存在するものの、名詞および名詞句の研究にとどまることが多く、構文との関係を論じたものはそれほど多くない。語彙意味論においては、結合価、語彙的アスペクトなどの動詞がもつ意味を研究することで種々の文法現象に説明を与えてきたが、その研究方法を名詞にも拡げ、また、通言語学的視点を加えた上で、名詞とそれらが持つ意味情報についての研究が必要となってくる。さらに言えば、名詞そのものの性質の研究だけでなく、名詞がさまざまな文法現象にどのように関わるかという視点からの研究もこれからますます重要度が増すと考えられる。

2.　各発表のねらい

文法現象には通言語的に共通して観察されるものもあれば、個別言語に特有の現象もあるが、本ワークショップでは、異なる言語の異なる現象を扱うことにより、名詞という品詞が共通して持つ特徴の一端を明らかにすることを目指す。具体的には 3 つの言語（日本語、ハンガリー語、シンハラ語）を取り上げ、各言語で名詞が構文形成に寄与する現象について考察する。各発表では、それぞれ英語や日本語などとの対照により対象言語における文法現象の特徴を探り、従来の動詞研究との融合という視点で、各現象についての解明を試みる。

発表 1 で扱うハンガリー語は、ウラル語族に属する言語であり、典型的な膠着言語で、文法関係は格接辞によって標示される。名詞に関しては、性の区別はないが、数は単数と複数とで区別される。人称標識も発達しており、動詞が一人称、二人称、三人称の単複形を有するだけでなく、名詞も同様の区別に基づいた標示を行い、「モノ」の所有関係を明示する言語である。所有関係を標示するための形態的手段として、所有人称接辞の他に、所有接辞がある（例：*Eriká-é* "Erica-POSS[*é*]"「エリカの（もの）」）。先行研究においては大きく分けて 3 つの分析（1. PossP の主要部＝所有人称接辞と同様の構造としての分析、2. 属格接辞としての分析、3. 形式名詞 pro としての分析）が提案されているが、発表 1 では、日本語の「の」が不定代名詞として機能する（例：「それは山田さんのですよ。」）いわゆる準体助詞と同様に、先行研究における 3. の形式名詞としての分析ができることを示す。一方で、形容詞と現れることはないため、日本語の「安いのがいい。」に相当する表現はつくることができない。ハンガリー語の所有接辞構文の成立には、所有者–所有物の意味関係が必要となることを示す。

発表 2 で扱う日本語は、文法関係は格接辞によって標示されるが、名詞に関しては、性も数の区別が義務的に標示されることはなく、省略も頻繁に起こる。このため、名詞に関わる研究には意味分野の研究があるが、まだ限定的である。特に発表 2 で扱う同格名詞句については研究が非常に遅れており、記述的研究もまだ十分ではない。しかし、名詞句間の語順に見られる制約や、形態的な手がかりなしに二つ以上の名詞句間の関係が解釈可能であるという事実は、そこになんらかの言語的仕組みが働いていることを示唆している。また、形態的手がかりの多い言語での同格研究を見ると、そこに存在する統語構造が垣間見える。本発表では、日本語同格名詞句にコピュラ文「A は B だ」に相当する意味関係を仮定することにより、日本語同格名詞句が表すことができるさまざまな意味を体系的につかむことができることを示す。

発表 3 で扱うシンハラ語は、インド・ヨーロッパ語族に属するが、日本語に似た名詞補文節構文が存在する。名詞補文節は主要部として機能する名詞のタイプによって節の形式が異なってくる。つまり、名詞補文構文の補文節の可能性は名詞主要部の情報（選択制限）によって決まるのである。名詞補文節は、シンハラ語では、日本語で観察されるような主格-属格の交替はないので、主語はもっぱら主格で標示される。しかし、写真名詞が主要部となる場合には、主語を主格で標示することも属格で標示することも可能で、一見、日本語で見られる主格-属格の交替と見えるような現象が観察できる。この現象に対して発表 3 では、主語が主格でマークされているときは主要部名詞が完全な節を導いているが、主語が属格でマークされている場合には、属格名詞が主要部名詞が選択する項となっており、節自体は不定詞節的な性質をもつと論じる。